様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３８０８４１

研究課題名（和文）老年期の都市移住者でつくる同郷コミュニティと母村との交流についての社会心理学研究

研究課題名（英文）A social psychological field research on the interaciton between the native village and the home-village communities consisted of old women.

研究代表者
石井　宏典（ISHII, HIRONORI）

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：９０２７２１０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、老年期に至った都市移住者によって編成された同郷コミュニティと母村側との交流実践、なかでも両者の協力によって成り立っている伝統行事に着目する。
　母村の伝統行事の場および同郷コミュニティの会合での参与観察を行うとともに、女性祭司および神前舞踊の踊り手たちにライフヒストリー・インタビューを実施した。都市移住者にとって、子ども時代の思い出話をくりかえし語りあうことや連綿と続いてきたムラの伝統行事に参加することは、時空間的移行に伴う変化のなかに連続性を見出そうとするいとなみといえる。

研究成果の概要（英文）：This research focuses on the interaction between the native village and the home-village communities consisted of old women in urban areas. Especially I pay attention to the traditional village events which are aided by members of the urban communities.
 I did participant observations in the village events and the gatherings of home-village communities. I also did life-history interviews with an old priestess and women who joined in the circle of the religious dancing. In spite of spatiotemporal transition, old urban villagers try to find the continuity by participating in the native village events and talking about their memories of childhood.

研究分野：社会心理学

キーワード：同郷コミュニティ　都市移住　老年期　母村の伝統行事　交流　心理的回帰　連続性　沖縄

１．研究開始当初の背景

(1)研究立案の経緯とこれまでの成果の発展

研究代表者はこれまで、沖縄本島北部に位置する集落の出身者たちが都市に移動・定着する過程において編成された同郷コミュニティを対象に、おもに職業的社会化過程の観点からフィールド研究を行ってきた。米国ハワイ州での在外研究期間を経て、平成 15～17 年度には科研費・若手研究(B)の助成を得て、那覇、大阪、ホノルル等でフィールド調査を継続させた。なかでも、戦後の那覇において集落出身の女性たちが多く流れ込むことになった衣料品卸市場の形成過程に着目し、市場での参与観察とインタビューを重ねた（おもな成果に、石井宏典「ならいとずらしの連環」2008）。この調査の過程で、老年期を迎えた彼女たちが同郷性を軸にした多様な小集団を構成していることがみえてきた。そこで、平成 20～23 年度には科研費・一般(C)の助成を受け、２つの同郷コミュニティを対象としたフィールド研究を実施した。その結果、参加者たちの相互行為に次の３つの特徴が見出された。①老いへの対応：成員たちは、自分自身の身体の衰えや家族の介護・看取り体験などを語りあうことをとおして、老いとの付き合い方を学ぶ。②母村への心理的回帰：子ども時代のふるさとでの共通体験を語りあうことでルーツとの連続性を確認する。③笑いの効用：集いの場でできる笑いの渦が日常の不安や緊張からの一時的解放と視点の転換をもたらす。

これらの成果をふまえ本研究では、同郷コミュニティと母村側との交流活動に注目した。

(2)学術的位置づけ

本研究は、地域・文化間の移動にさいして家族や親族、同郷人関係、エスニック・コミュニティなどが担う諸機能を考察した研究の流れに位置づけられる。都市への移住と定着の過程を支える親族ネットワークの諸機能については、T. K. Hareven によるライフコース研究（Family time and industrial time, 1982）やペルーへの日本人移民が編成したネットクワークを考察した成果（赤城妙子『海外移民ネットワークの研究』2000）などの知見と照合することができる。また、移民家族をとりあげた C. E. Sluzki の研究(Migration and family process, 1979）は、新旧環境の不連続性に直面する移住過程において家族が成員間の役割や機能を変化・分化させることで危機的場面に対応することを教える。この研究からは、移民家族が抱えることになる葛藤や対立を、過去や未来志向といった各成員の時間的展望に注目して考察するという観点を継承する。

日本の都市における同郷会を対象にした研究によれば、同郷会は当初、職や住居の確保のための相互扶助という道具的機能を中心に担ってきたが、移動先での生活の安定化とともに次第に表出的機能に重心を移し、出自的アイデンティティを確認するための場として位置づけられるようになった（石井宏典「職業的社会化過程における『故郷』の機能」1993 他）。本研究でとりあげる同郷コミュニティについても、こうした機能的変遷を考察する視点を共有し、さらに、ライフサイクルへの位置づけを重視することで、より多角的な考察を試みる。また、生涯発達心理学の分野における成人・老年期研究からは、世代と世代をつなぐ役割の重要性を指摘した諸成果をふまえたい。

２．研究の目的

本研究は、沖縄の特定地域から国内外への人びとの移動と定着の過程を対象にした一連の調査研究を受けて立案されたもので、老年期に至った都市移住者によって編成された同郷コミュニティ（同郷会や同窓会など同郷人どうしの結びつき）と母村側との交流実践に着目する。そして、これらの交流が個人やコミュニティレベルに及ぼす影響について考察する。具体的には、沖縄本島北部の一集落とその同郷コミュニティとの交流場面に密着する。とくに、多くの集落出身女性が加勢することで成り立っている伝統行事シニグについては、準備から当日までの参与観察を３年間にわたり実施する。また、本研究を通じて、地域コミュニティの再生という今日的課題に取り組むさいに、在住民と出身者の交流という視点が重要なことを示したい。

上記の交流実践を考察するにあたり、歴史状況と重ねる作業はもちろんのこと、当事者たちのライフサイクルに位置づけての理解が不可欠となる。かつて青壮年期の人たちによる同郷的結合は、移動先での定住といった「将来を見据えた現在」を支えるための活動が中心だった。その結合は、母村から都市に移行するさいの足場を与え、両者を媒介する緩衝空間となり、さらには生活の糧となる職業的社会化の現場を提供する役割を担ってきた（石井宏典「職業的社会化と同郷ネットワーク」2005）。一方、本研究の対象は、定住化の過程を経て老年期に至った人たちによるつながりであり、ここでは「過去への振り返りと現在」を結ぶような活動が中心となっている。参与観察とインタビューの成果を丁寧に考察する作業をとおして、母村回帰志向を抱えた老年者たちが母村とのかかわりを再び深めることの意義を明らかにする。

３．研究の方法

母村と同郷コミュニティの交流の諸相を把握するために、その主要な機会である母村の伝統行事の場に着目した。3 年間で計 27 回のフィールド調査を実施し、伝統行事の場および同郷コミュニティの会合において参与観察を行い、参加者たちへのインタビューを実施した。その概要は以下のとおりである。

(1)母村の伝統行事への参与観察

のべ 20 回の母村調査を実施し、ムラの３人の神人（カミンチュ、女性祭司）が取り仕切

る 10 種の年中行事に参加した。なかでも旧暦 7 月に一週間にわたって行われるシニグ行事には毎年参加し、2009 年に開始したこの行事の場を記録する作業を続けた。あわせて、現在までの行事の変遷について神人やムラの年配者たちに聞きとりを行い、急激に変化した生活環境のなかでこの行事が継続されている背景を探った。

(2)伝統行事の中心的担い手へのライフヒストリー（生活史）調査

2009 年に着手した、ノロ（神人の中心）である高齢女性のライフヒストリーを詳細に把握する作業を継続するとともに、膨大な聞きとり資料を時系列に編集して考察を加えた。

(3)伝統行事の踊り手たちを対象にした母村および同郷コミュニティ調査

2015 年まで７年連続でシニグ行事の参与観察を行うとともに、踊り手たちへの聞きとり調査を実施した。一週間にわたる行事の中心には、ウシデーク（臼太鼓）と呼ばれる女たちの神前舞踊が位置づけられている。このウシデークは、1980 年代以降、都市で編まれた同郷コミュニティ（福女会およびほたる会、後述）の支えによって成り立ってきた。その経緯を把握するとともに、近年の行事の動向を記述、考察し、第一報としてまとめた。

(4)同郷コミュニティの会合調査

中南部都市圏において老年期の同郷女性たちによって編成されている２つの同郷コミュニティを対象に、それらの月例会合の場での参与観察を継続した（2011 年から実施）。それぞれの場において展開する語りあいの内容や相互行為の特質を見極める作業を進めた。福女会には 8 回、ほたる会には 6 回、あわせて 14 回の月例会合に参加した。

２つの会についての概略は以下のとおり。

a.福女会：1980 年に当時 60 代の那覇に住む同郷女性によって結成された。当初は、戦後復興の過程で形成された衣料品市場で働く人たちが中心となり、仕事を終えた夜に特定の会員宅に集っていた。その後、メンバーの高齢化にともなって入れ替わりを繰り返し、現在は 70～80 代の 20 名余りで構成されている。長く母村のシニグ行事に参加してきた人たちも少なくないが、現在、踊れる人は少数となった。毎月 20 日に那覇の中心市街地にある古いホテルのレストランに集い、昼食をとりながらの歓談を楽しむ。

b.ほたる会：1990 年代半ばに当時 50 代だった同郷の同級生どうしによって結成された。1937 年生まれの彼女たちは、小学１～２年で沖縄戦を体験している。中卒（1952 年）後に高校に進学した者は１名のみで、残りは中南部や大阪に働きに出た。現在、70 代後半となった 15 名ほどで構成。毎月第二土曜日に、宜野湾市の国道 58 号沿いの和風レストランで昼食をとりながらの歓談を楽しむ。現在、メンバーのおよそ半数がシニグ行事に参加する。

４．研究成果

(1) ムラの伝統行事の変遷と継承についての考察（論文「祈りの姿勢―ムラの伝統行事を守りつづける神人たち」）

2010 年～2013 年までの 4 年間にわたって実施した、シニグ行事への参与観察および神人たちへの聞きとりをもとに、行事の現状とこれまでの経緯を把握し、地域の歴史的文脈に位置づけた考察を試みた。そのさい、ムラの生活環境が著しく変容するなかで、神人たちが個々の行事をどのように意味づけ、行事を取り巻く状況変化にいかに対応してきたのかに注目した。

戦後、ムラ人の多くが自給的な半農半漁の営みから離れるなかで、ムラの豊穣を祈る神信仰への切実さがしだいに薄れることになった。とくに 1975 年の海洋博覧会の開催を契機にしてムラ外での賃労働に就く女性が増えると、神酒造りなどの裏方を担うムラの輪番制が徐々に崩れていった。やがて行事は、ムラ全体で支えるものから神人やその縁者が背負う小さなものになった。こうした状況変化のなかにあって、残された３人の神人たちは、供物の準備過程にも積極的にかかわることで懸命に行事を継続させ、ムラ全体の豊穣と子孫の無事を祈ることを自分の役目として引き受けていた。

(2) ムラの神行事を背負う神人の個人史についての考察（論文「ムラが生んだノロ―沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー」（上・下））

現在まで 70 年近くムラの神行事の中心である「ノロ」を務めてきた女性（1932 年生まれ）への聞きとり資料を時系列に編集し、考察した。

彼女は、かつて国家制度に支えられていた公儀ノロの伝統とその権威が薄まりゆく時代状況のなかで、従来ノロが配置されなかったムラにおいて 10 代半ばでノロとなった。論文（上）では、ムラの旧家に生まれた彼女が、病気に苦しむなかで見た夢をきっかけにして、地元のユタ（民間巫女）をはじめ周囲の大人たちによる方向付けを受けながら、ムラのノロに就任するまでの過程が辿られた。そして論文（下）では、生活環境の変化とともにムラ人の神信仰が薄まり、神人組織も縮小していくなかでも、神のまなざしを内在化させた彼女が家族の支えを受けてムラの神行事を継続してきたさまが辿られた。そして、彼女をはじめ３人の神人たちが行事のたびにムラの拝所（聖所）をなぞりつづけることで、急速に変わりつつあるムラにあってもそれらの場所が守られていた。ムラ人は土地の神々や先祖とのつながり（個人を超えた連続性）を感じられる場所に包まれながら、他のどこでもないこの土地に生きる者としての日常を送ることができている。

(3) ムラ人と都市の同郷人が支えあう行事の場についての考察（論文「都市とムラを結ぶ踊りの輪―沖縄一集落の伝統行事シニグを支える人たち}）

シニグ行事への７年間の参与観察と担い手たちへの聞きとりをもとに、行事を支える人たちのあらたな関係性の形成過程に着目した。踊りの場の身体配列には、かつて、以下のような特徴が見られた。③は小さな太鼓を叩きながら難しい伝承歌をうたう熟練者の輪、②はまだ経験の浅い若年者の輪、そして①は踊り手たちを取り囲む見物人の輪である(図１)。かつては見物人には子どもも多く、①幼いとき踊りを見ていた人が、②青年となって輪に加わり、長年の経験を重ねて③中・老年期には歌い手を務める、というライフサイクル全体に渡る社会化の過程が、この三重の輪に織り込まれていた。

現在、ムラ在住の参加者が減り、同郷コミュニティの成員たちが加勢することで踊りの場が成り立っている。すなわち、③はムラ人が中心で、②は同郷コミュニティの成員が多く、いずれも中・老年者が多い。経験の浅い者は外側の輪に位置することで、内側の熟練者の踊りを参照しながら踊りについて行くことができる。つまり、二重の輪は新参者を受け入れやすい身体配列といえる。シニグ行事はこうして、ムラ人と老年期にある同郷人を結びつける貴重な機会となってはいるものの、青年や子どもの参加はごく少数で、かつてのようにすべての年代の女性たちが交わる場ではなくなっている。

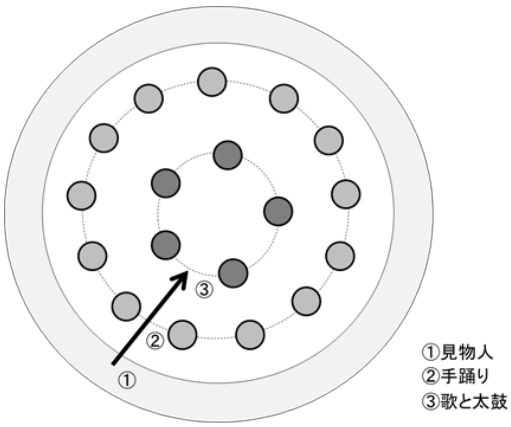

図1 シニグの身体配列

また、青年期にムラを離れ都市で老年期を迎えた参加者たちは、子ども時代のふるさとの面影と現在のムラの姿との落差に戸惑いを覚えながら行事の場に足を運んでいた。彼女たちにとって、古い先祖の代から連綿と受け継がれてきた踊りの輪に加わることは、子ども時代とは大きく様変わりしたふるさのなかに連続性を見出し、自己をその連続性に位置づけようとするいとなみのようにみえる。

(4) 同郷コミュニティの共同想起場面についての考察（学会発表「雰囲気を反芻する―同郷コミュニティの共同想起場面から」）

老年期にある同郷女性たちによって構成された２つの同郷会の月例会合の場での参与観察を継続した。これらの場は、すでにふれたとおり、①互いに近況を伝えあい、②老いへの付き合い方を学びあい、③子どもの頃のふるさとでの思い出を語りあいながら、④笑いの絶えない場となっている。①は現在、②は今後のこと（未来)、③は過去に焦点を合わせた交わりといえる。今回は、ふるさとを同じくする者どうしだからこそ成り立つといえる③に着目し、老年期にある彼女たちが、ふるさとでの子どもの頃の思い出を語りあうことには、どのような意義があるのかについて考察した。

まず、③にかかわる話題のいくつか紹介する。

a．帰り道に感じた空腹感

小学校から一里ほどあった遠い帰り道で、集落を見下ろせる高台まで辿り着くと、きまって急にお腹がすいたとある人が話した。すると他の人たちも、そうだったと頷く。家に帰れば、ふかした芋など何かしら食べ物にありつくことができたからこそ、お腹が空いたのだという。

b．葬式の晩の恐ろしさ

かつて、葬式を出した晩に当家から集落の外にマブイ（魂）や魔物を追いやるための儀礼があったという話題。龕を担いだ男たちが「ホー、ホー」という低い声を出しながら目には見えないマブイをムラ境に立つガジュマルの木まで追い立てた。みんなで「ホー、ホー」と声色をまねながら話すなかで、当時全身で感じていた恐ろしさが甦ってくるようだった。

c．もらい乳がもたらした安堵感

小学１年生の頃に子守でおんぶしていた赤ん坊が泣き止まなくて困り果て泣いてしまった、という話題。畑から戻ってきた同級生のお母さんが自分のおっぱいを出して赤ん坊の口に含ませ、それで赤ん坊が泣き止んだ。芋掘りした汚れた手だったけれど、そのときは何とも思わなかった。この話を受けて、他の人から類似の体験が語られた。

d．豆腐の豆の香り

豆腐の原料にする大豆の収穫をすませ、家ごとに集落の広場でゴザを敷き、くるまん棒という道具を使って乾燥した鞘を叩いて豆を出す作業が行われた。このとき周囲に飛び散ってしまう豆があって、何日か後の雨の日にそれが芽を出した。このもやしを摘んで、おつゆに入れると何ともいえない香りがしておいしかったと頷きあう。

e．別れの切なさ

中学卒業後に集団就職で大阪に向かう同級生たちを那覇の港に見送ったときの情景。見送る側は、旅立つ友達をうらやましく思いながら別れのテープを握っていたが、船上のひとりが大声で「アンマー（お母さん)」と泣き叫ぶと、とたんに場の空気が張りつめ、肉親と別れる辛さが身に沁みたと語りあう。

これらの共同想起場面において、もうすぐ家にたどり着けるからこその〈空腹感〉が、

死者を送るさいに身に迫ってきた〈恐ろしさ〉が、もらい乳で赤ん坊が泣き止んだ〈安堵感〉が、雨後に芽を出した豆の〈風味〉が、そして、身を切られるような別れの〈切なさ〉が、ふたたび味わわれていた。擬音語や声色をまねて語ることは臨場感を増し、当時の雰囲気や身体感覚を呼び覚ます助けとなっていた。

子ども時代への心理的回帰を示すような、こうした語りあいは、当時の出来事のなりゆきをたんに確認しあうだけでなく、その出来事に浸みわたる雰囲気や情感をなぞり反芻しあういとなみとなっていた。また、時を挟んで同じ話が繰り返されることがよくあることから、これらの出来事は彼女たちのなかで重要な位置を占めていることがうかがえる。子ども頃のそのときどきに味わった雰囲気や情感は、いわば、その人の芯をつくってきたのかもしれない。

青年期に都会に働きに出た彼女たちは、長年の都会暮らしを経て老年期に至っている。行事のさいに仲間と連れ立って母村に足を運ぶ彼女たちは、自然の循環と共にあった子どもの頃の暮らしから大きく様変わりした母村の現状に戸惑いを感じていた。そんな彼女たちにとって、同年輩の者どうしが集まって子ども時代の思い出を語りあうことは、「ふるさとでの日々から遠く離れた現在」にあって、ふるさととのつながりを再確認する作業となっている。また、現在まで連綿と続いてきたムラの伝統行事に参加することは、時空間的移行に伴う急激な変化のなかにあって連続性を見出そうとする試みといえる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

①石井宏典『都市とムラを結ぶ踊りの輪―沖縄一集落の伝統行事シニグを支える人たち』、茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」、20 号、1-32、2016、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/12763

②石井宏典『ムラが生んだノロ（下）―沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー』、茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」、18 号、1-29、2015、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/12111

③石井宏典『ムラが生んだノロ（上）―沖縄一集落に生きる神人のライフヒストリー』、茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」、17 号、1-30、2014、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/10357

④石井宏典『祈りの姿勢―ムラの伝統行事を守りつづける神人たち』、茨城大学人文学部紀要「人文コミュニケーション学科論集」、16 号、1-31、2014、査読無
http://ir.lib.ibaraki.ac.jp/handle/10109/8717

〔学会発表〕（計　１件）

①石井宏典『雰囲気を反芻する―同郷コミュニティの共同想起場面から』（シンポジウム：農と食と心理学 4）、日本質的心理学会第 12 回大会、2015 年 10 月 4 日、宮城教育大学（宮城県仙台市）

６．研究組織

(1)研究代表者
石井　宏典（ISHII　HIRONORI）
茨城大学・人文学部・教授
研究者番号：90272103

(2)研究分担者
無し

(3)連携研究者
無し